

## 「ヤマガラと子供達と妻へ」

「今日は私の番ですからね」

婆さんは、縁側の日溜まりの座布団に小さく座り、庭の植込の向こうを見ている。庭先の柿の木の紅葉も枝にわずかだ。

「もう、そろそろですね」

皮付きピーナッツ二、三粒を掌に載せ転がす。

すると、やっぱり、どこからかスイツとやってくる。

柿の木の枝先をかすめるようにして、それはまさに胸が透くばかりにスイツと、指先にやってくる。指先にとまり、黒くて真丸な目玉がおさまった頭を思案げに動かし、ピーナッツを啣え、飛び立つ。

次が来る。

欠片も交じっていて、早まって欠片を啣えてしまった時には大きな粒に啣え直す。で、大きな粒からなくなっていく。

初めは皿に乗せて縁先に置いた。

ある日、袋から皿に移そうとした爺さんである私の手にいきなりやってきた。それからだ。

今では婆さんと交替である。婆さんもあのとときめきを知ったのだろうか。

ヤマガラが指にとまった。その時、爺さんの身体の奥の背骨の裏側あたりに、電撃のようなものが走った。

すっかり錆付いてしまった頭に、ああ、これはつと、ポツと明かりが灯った。

産まれたての息子に指先を握られた、その時の想いとそっくりだ。

それに、若かった妻の手に初めて触れた時の感じでもあった。

「来てよし、帰ってよし」

「何が、ですか」

二人の息子たちは結婚し、町で生活している。

この盆の時は賑やかだったが、疲れた。それに、帰った後が辛い。

今度この山里に来るのはお正月になる。それまでは誰もやってこない、のだろう。

近所の親しかった者も町場の子供に引き取られたり、向こうの世界に逝ってしまった。だから、お前だちは明日もくるんだぞ。

「生命」の明かり、と、今は、はっきり見えるのです。